

---

# **牢屋と僕。**

蓮希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

牢屋と僕。

### 【Zマーク】

N3636E

### 【作者名】

蓮希

### 【あらすじ】

牢屋の見張りが仕事な僕と捕まつたさまやかな罪人と過ごす毎日

## プロローグ

僕はこの国の牢屋の見張りを任されている一人だ。  
個人プロフイールをいうと……え？ 誰も聞いていないつて？ せつか  
くだから聞いて行きなよ。

牢屋に居る僕ぼプロフイール聞ける人なんて数少ないんだから。

ユウト 岁は此間21の誕生日を迎えた。

よろしくね？…え、短すぎるって？ わがままだなあ。

今日は僕の毎日のうちの一歩を教えようと思つ。

「罪人さん？ 名もなき罪人Eさん？」

「誰が名もなきよー？ あたしにはシェルつていう可愛らしき名前が  
あるのよ！」

「御免御免。万引きさん？ 100万ジェリーもするメダル盗もうと  
したのは何処の誰だい？」

ジェリーというのはこの国のお金の単位だ。序に言つとお金は細長い宝石みたいなキラキラしたもの。赤いのは100ジェリー。桃色のは50ジェリー。序に一番下は1ジェリーで白だ。

大きく分けると上から 黒 青 緑 赤（桃） 白 になる。

つて何で僕お金のこと詳しく話しているんだろう？

「…そういわれると何もいえないわ。取り合えず飯頂戴！？」

「たまには抜きで良いよですー！ シュフ」

「了解です」

「うわあああああーーー? 何でこんなとこひいてシエフが面おも白しよー?」

鉄格子の中で叫ぶ万引きさんにクスクスッと笑う。

「あーあつ薄つぺらくなつたら此処をとおりぬけられるの」

۱۷۰ نویسنده

そしてそれを弄るのか僕の仕事（しゃないけど  
本來は見張りなん  
だけど。）

「嘸—！！」

「いやいや、うわづきは泥棒の始まりだよ?」これ以上何か盗んだら

生が三百年になつても良いの？あー、いいんだ。そつなんだ」「

!

そう言って鉄格子越しに疾風になるジエル。それを見て笑う。

「冗談。ちゃんとショフも作ってるよ」

その言葉に笑つたシェルを見てホツと息を吐いた。

罪人にシェフかよと思つた人も居るだろ？が、実は僕も思つた事も一度あつた。

一度あつた。

『罪人だろうが飯ぐらい一般人と同じものを食わせる』  
というのが陛下の命令。何故かと聞いたら勿論　牢屋で死んだら生臭くなるからだそうだ。

相変わらず陛下らしいというか……19歳で陛下となつたあの人は  
この国で一番若かつたらしいが今は26歳だ。あれから七年もたつ  
たのかあ……

七年前もこなんだつた。出世してないのか僕……  
序に七年前は14だ。若いだろ？そのときから僕は監視副長という地位についていたんだ。

「ユウト監視長……ウェラスが暴れています！」

「アイツ？ほっとけ。そのうち腹が減りすぎて倒れる

「わかつてんなら早く飯をよこせ…………」

遠くから聞こえてきた絶叫は罪人Fのウェラスだ。  
つかまっている理由は食品泥棒。遠くの小さな村からやつてきた奴だ。

腹が減ると暴れだす困った囚人だ。

「落ち着けよ、馬鹿

「馬鹿言つんじゃねえーーーあーーー腹減った。」

「僕が居るとおとなしいんだ。」

「お前に俺の絶叫はつうじねえ。どうせ今も耳栓してるんだろ？あー、読唇術って良いな。俺も使ってーーー」

「黙れ」

牢屋A……つまりこの場所の監視長である僕は、この一人を監視している。  
もう此処には一人しかいない。

殺されたり罪が許されたり……色々あつたのだ。

その話を、これから暇な時間を作つて聞いてもらおうかなとか思つてる。

といつより毎日暇なんだけね。僕と罪人Aから罪人Fの楽しき毎日をいじ紹介しようと思った。

# 罪人Aと僕。

「監視副長！アースが夕食をとり終わつたようです！」

この時点でこの牢屋には一人しか居なかつたのだ。

「僕が様子を見に行くと彼は驚きで眼を見開いて、今度は眼を細めた。

- ۱۷۲ -

平気だな」「アーヴ君は」

作を三三簡單に、かにむき附屬せし。アマノ二郎子二

見せた。

# 「飛んで蜂見る冬のアース」

呆けた表情のアースはポリポリッと頬をかいた。分からぬといふ

僕は右手に持つてある鍵を振り回しながら

「実はこの牢屋猛毒蜂が居るの知ってる?」

「……………うざやあああああああああああああつー！？」「殺す気か！？」

「誰も言つてないけど……死にたいなら」

すまなか二たああ二あああ！」

アースは大量殺人犯として捕まっていた。何時も無表情に見えるが僕が来ると表情を和らげる事が多い。彼が言うに安心できるんだと。最初ボーアズラブは僕受け付けないよ?といったときは僕まで殺されそうになつたことだ。

いや……一応牢屋の監視副長という地位に就いているから剣も弓もある程度の武器なら扱えるんだが。

序に一度アースの罪を監視長に聞いたことがあつたがフルフルッと首を振られて分からぬといわれた。

「ふうつ……そのつむじ僕と筋比ひが強いかはつきつせよつじやないか。」

その言葉に勿論だつーと声をあげたアースを見て僕は笑つた。

落とした。

何をつて、アースの食事を。アースが眼を見開いて涙眼で見つめてきた。

腹が減つても一日は死なぬ。有名な言葉じゃないか。なのになんでそんな眼で僕を見つめるんだい？アース。

「それは腹が減つたら戦はできぬだろ？」「

何で僕の心読んでるの？アース。君読心術使えたんだ凄いね。

「口に出しているだろ？」「……ああ……俺の晩飯」

このままだとの字を書いてしまいそうな勢いのアースにふつと僕は笑う。

きつと睨まれた。

「笑い事じゃない！」

そんな事を話していると後ろから声が聞こえてきた。

「元気そつだね。アース、私のコウトオオ！－」

そう言って抱きついてきたのは僕の上司である監視長 ハミさんだ。

「こうより何時から僕は貴方のものになつたんですか？ふふふとエミさんは笑つて何処かの劇団と間違われそうな演技を始めた。

「ああ、今日も麗しいね。私のシェール」

「待て！？コウト何処いきやがつたエミ！？」

「まあ昆布様。また来てくださつたの？こんなわたくしのために『

「昆布は美味だ……つて昆布様つて何だ！？てかお前の裏声すげえな！』

とうとうノリツシコミまで始めたアース。うん、楽しい。

「フフフッ、愛しき君のためならば火の中だって！水の中！アノ子のスカートの中だつて…」

「ふふふつ、それは犯罪でつかまつてしましますわ昆布様」

「はははつその通りだね。シェール。我が君

「大好きですわ。昆布様……」

「「そして一人は結ばれる。三日後の満月の夜に……しかし、この幸せはそう長くないことに一人は気付いていなかつた……」「オイイイイ！？」

もう突っ込む言葉をえないようだ。絶叫をあげてからクタリツと鉄格子越しに座り込むアースが見えた。

そんなんで僕たちの愛という名のコントを終える筈が無いじゃないか。

「『我が愛しき君にプロポーズをしようと思つたら金が無くて指輪がなかつた。』…シェールと昆布の戀…そして、結ばれてから二回目の満月の夜。なんとシェールは…つ！次回！2008.1.3.4

55話！』

僕に続きエミさんが言つ。

「『シェール？誰だいその方は…浮氣だと！？お父さんは…じやなかつた私は許さんぞ！？そんな何処の馬の骨かも分からぬ奴に私の妻をやるわけには…つ！』『御免なさい昆布様。私は勿論貴方を愛しておりました。それでも今は…つ！』『俺がシェールを足してじゃない。愛しているんだー！』でお送りさせていただきます。

それではまた一年後のこの時間にお会いしましょう～「  
ばいばい」と手を振つてゐる僕らに再び突つ込みの雨

「話が多いし一年に一話だつたら何百年かかるんだこの話つ！てか  
今大体内容話しちまつてるじゃねえか！…！」

「上手い！座布団四枚あげる！」

拍手しながら何処からか取り出した座布団をほいつと鉄格子前に置く

「いらねえ！」

「ええ？ いらないのかい？ 実はこの中には美味しい美味しい晩御飯  
のおかずが数品…」

「いる！」

「入つてゐわけ無いだろつ」

僕とHIIIとのコントで力尽きたアースに流石にかわいそつだと追  
加の「ご飯を持つてくる僕は優しいだろつ？」アース。

こんな感じで牢屋とは思えぬ明るき日常を僕とHIIIさん、そしてア  
ースとすゞしてゐた。



## 罪人Bと僕。

「……リクリア。年齢不詳……ねえ。」

ゆらりと私室の椅子の上でゆれるエミさん。

僕はその横で本を読んでいた。……アースの見張りは、僕たちの部下 ユキに任せていた。

僕たちが見張るのは牢屋A。この城の端にある大きな牢屋。そしてその真逆にある牢屋はそのまんま牢屋B。僕に入る前に牢屋Aの者は隣国に移されたりと色々されたので牢屋Bの方が人數的に多い。そのため、今は僕とエミさん ユキの三人しか見張りが居なかつた。僕は何かを呟いたエミさんの手からそつと書類を抜き取りその書類を上から下までざつと眺めた。エミさんが何も言わない限り眼を通しておけということなのだつ。

この書類には僕たちが見張つている牢屋に新しく来た罪人のことが書かれていた。

名前 リクリア

年齢 不詳

性別 女

『隣国の王子を殺害した為この国のアストラルに連れて来られた。この者の出身地は……』

詳しい事が書かれているけれどこの書類の半分以上の文字は無駄だと思われる。

隣の王子を殺した為。だけで良いじゃないか。こんな面倒くさい文章書かなくても十分だと思われるが？

そんな事を考えている僕の耳にエミさんの声が届いた。

「殺した…ねえ。多分あの子、剣の使い方下手だよ」

一瞬でそれを見抜く貴方は何ですかとか思わず突っ込みたくなつた。

HIMさんの目は確かだ。一目見ただけで戦闘ができるとかできないとか見抜けるのだ。

本当に僕凄い人を上司に持つていいよね。

「ほ〜くのモルモット（実験台）～ それさえあ〜れば牢獄もた〜のし〜いのにね〜」

「ねえ HIMさん。本当に剣駄目なんですか？」

「あれはメスとか実験用具は使いこなせるタイプだよ。うん。多分。

怖いよ。」

HIMさん…… 罪人Bが怖いです。助けてください。…いや駄目だ！  
！此処でギャグ体質の僕が逃げてどうするんだ！

「リクリア。」

僕が彼女を呼ぶと、僕と同じ年ぐらいの外見を持つ少女はニッコリと微笑んだ。

「あっ、僕のモルモット。」

そう言つて、何処からかメスを取り出した彼女はヒュンシと牢屋の鉄格子を切り裂いた。

「どええええええつ！！？」

向かい側に居たアースが大声を出す。うん、僕も珍しく叫びたい気分なんだ。

メスが自分の目の前に来たのを見てしゃがんで少女に足払いをかけた。…がくるりっと回転して僕に向き直った。

「滅茶苦茶強いんですねが。HIMさん」

「そうだ、眼科行こう」

そう言つて本気で行っちゃ いそつなHIMさんを横目で見つめてひゅ

んつと移動してアースの鉄格子に手をかけた。

「取引しようか、リクリア」

その言葉にピタリッと動きを止めて首をかしげて僕を見てくるリクリア。可愛いのにな、この姿は。

「取引？ なあに？」

そういうリクリアに僕も微笑んだ。

「君が、死ぬことが決定しても生きることが決定しても……この牢屋から出られるときに此処に居るアース君を解剖する権利を『えよう！』

「俺を巻き込むなよ！？ 大体それで相手が納得するわ……」

「有難う！－じゃ、これから僕のために死なないでね？ アース

「納得したあああ－！－？」

恋人にいうような台詞を吐いたリクリアにアースは涙眼だった。

こうして人いわくマッドサイエンティストとでもいうのかそんな少女（？）

リクリアが新たにこの牢屋に来た。恐怖の毎日が始まるかもしれない…（多分アースの）

## 僕の一曰（前書き）

前回の更新からだいぶ遅くなりました。；；

## 僕の一日

AM\* 4：29～24 起床

『ピコンピコン…ピコ…ピコン…ピ――――――』

「誰か死んだ?」

そう言つてむくつと起きる僕。田覚ましを止めてベットから降りた。軽く首を動かすとコキコキコキコキコキイツと音がする……箸が無い。そんな音がしたら田覚ましじやなくて僕が死んでる。

僕が住んでいるのは城の隣にある…まあ寮みたいなものだと思つてくれれば良い。一応城とは繋がつていて行き来が楽なのだ。この国に家が無い城関係の者はここに住み家があるものはちゃんと帰る。僕の家はこの国と仲の良い隣国にある。

見張りよひの制服を身に纏うとドアが蹴り破られた。

「よひ」

そう言つて入ってきたのは仮にもこの国の 陛下 である人物。名をウェレスト。一応僕の親友かも知れない。

「かもつて何だ。俺達は立派な親友……だろ……?」

「何その自信なさげな言葉。窓から落とすよ」

「何でだよ。てか仮にも陛下を落とすな。」

「煩い黙れ。」

「てかお前俺が年上つて忘れていないか?」

いや、一応覚えているけれども。

早起きする僕が一番最初に出会つ人物 陛下

AM\* 7：42 朝食

「私の可愛いユウトー!!」

「煩いです。黙つてくださいエミさん。」

そう言いながらもくもくと朝食を食べる。よつこらしじょつと僕の向かい側に座るエミさん。

この城での食事は大抵各部署で食べる。ということでお食事は僕たち全員で決め牢屋の…前までアースだけだったが、牢屋の皆と食べる…ことにしてる。夕食は家がこの国にあるものは帰る。それだけ。「…にしても本当にエミ監視長はユウト副監視長が好きですね。」

「失礼な。ユキも愛しているよ」

「有難うござります。でも私はそんな安っぽい愛いません」

「…」コリと笑つて言つユキは傷ついた表情をする。  
何時もニコニコ笑い、何でもすぱっと切り捨てる。笑みの後ろには何が隠れているか分からぬ、それでもほのぼの出来て僕の大好きな女部下 それがユキ。

AM\*8:00 見張り開始

「お早う。リクリアにリクリアの生贊兼罪人A君。」

「何でコイツは名前で俺はそんな扱いなんだよ！…？」

僕の言葉にツツ ユミを入れる罪人A…もとい、アース。この男はリクリアの生贊である。

無論、僕がモルモット（実験台）になることを恐れた為…ではないのだ。うん。そういうきつておこう。

「あつ、ユウ君だ～」

僕を指差すリクリア。見た目的に癒し系な少女。だが喋りだとマツドサイエンティストという怖い少女である。

「お早うリクリア。弄るなら僕でもなくユキでもなくアースかエミさんにしてね？」

「大丈夫。ユウ君とユキは弄らないよ。僕が興味あるモルモットは

…アース、だけだし。でもエミって人も面白いよなあ…」

「何故私を巻き込むような発言をするんだあああ 「ウトオオ！-」  
「ミヅガ音を入まへー」「なーからゞ

「僕が巻き込まれたくないからです」

ニヤリッと嫌な笑みを作るリクリアと頭を抱えるエミさん。僕はニコニコ笑う。

「俺、忘れられてる」

牢屋の隅っこで膝を抱えているアースは見えないよ。僕。

AM\*11:30

セヨニトアリズレヤ僕のモルモット

「何で言い直すんだよ！！？」

「それ美味しいだから僕に頂翼をもないと今すぐ実験するよ！」

「あーなるなるなるなるなるーーーから上めてくれえええーーー！」

そんな一人の会話をBGMに僕とHIMさんとユキは昼食を取る。てか君達……向かいだからといってどうやっておかげ貰うんだよ。

卷之三

「コキ。」これ全部捨てといてくれるかい？愛しごコウア。これ面倒くせこから全部やつとか

「何で僕に命令！？ てか、貴方がやらないと意味がありません監視

ばつさばつさと書類を切り捨てる僕等。

大体牢屋の見張りなのになんでこんなに書類が多いかというと  
全て陛下が回してきたものだつたりする。

『牢屋Bは大変だし他のところも何かと忙しいんでな』

その陛下の一言でこの広い城の四分の一近くがこの牢屋Aに来てたりする。まあ元々犯罪など問題らしい問題は余り無いのでこの城が楽なのは確かだつたりする。

「頑張れよー」

遠くから聞こえるアースの声。滅茶苦茶ムカツク。元々この牢屋の見張りが仕事の主なので本当は余り関係なかった書類整理はこの牢屋の入り口付近にあるテーブルで行っている。

これなら牢屋の奴等がちゃんと分かるから良いのだ。

「頑張つてよー！終わつたら僕のモルモット弄つて良いから」

その言葉に僕とエミさんのやる気は微かに上がつた。

そして今日も陛下の一言のせいで書類整理を頑張ることになる。

PM\* 6:50 見張り終了

「明日なー

「バイバイ」

そういう牢屋の二人に手を振つて僕たちは牢屋を出る。

「にしても一人になつたからアースも寂しくなくなつたんじやないでしょーか」

ユキの其の言葉に笑う僕とエミさん。

確かにその通りだと思う。アースも言わないだけで絶対寂しいだろう。

「こんなこと言つと酷いけど、良かつたよね」

「そうだろう？牢屋Bだけじゃ酷いからね。今度Bから貰つてこようか」

「どうせなら面白い人が良いよね。ユキ」

「そうですね。騒がしい職場の方が私は好きです」

その一日後……また新たに牢屋Aに罪人が一人増えることはまだ三

人は知らなかつた。

## 罪人と僕。

ドタタタタタタタタタタタタッと牢屋に足音が響く。

書類整理をしていた僕と眼鏡をかけたユキは顔を上げた。

「ユキッ！ ユウトー！！！ 牢屋Bから罪人貰ってきたぞ！！！」

「本当ですか！！？」

またしても新人。それは喜ぶべきじゃないのだろうが何か感激した。ユキは下がつてきた眼鏡をクイッと上げて微笑んだ。

「また、この牢屋がにぎやかになりそうですね。」

その言葉に僕たちは微笑を作った。

そしたら、扉が開いた。

「……………今日は…………」

そう言って入ってきたのは桃色の髪をした12になるかなならないか。何でこんな子が？って思うこともあるかもしれない。が、僕たちは違った。

「可愛い……可愛いわね……」

そう言って入ってきたのは桃色の髪をした12になるかならないか。が、僕たちは違った。

子供が余り好きではないユキも頬を緩めてその子を見ていた。

兎に角、可愛すぎるのだ。

「…………抱きつか、無いでください………… 呪いますよ？」

だからその子の言葉に僕たちは固まるしか出来なかつた。

やはり罪人として捕まるのだから、まともな人物を期待しちゃ駄目だね。

「アーティ、昼食」

「慣れなれ、しく……名前を呼ばないでください」

そう言ったアーティに「ううん……と僕は唸る。序にユキもエミさん

も先に昼食をとっている。アーティは騒がしいのが嫌いだからと一番すみの牢屋を選んだのだ。

「そういうわれてもね。名前呼ばないと、罪人になるよ?」

「呪います」

「僕の特技呪い返しなんだ。」

それは実は確かだつたりする。何か小さな頃から色々興味持つたものは調べまくつたりしてたし……

それを聞いてアーティはハツと顔を明るくさせた。……やばい、可愛い。

「本当ですか?……毒薬とか、詳しいですか?」

「え、あー……うん。」

「なら……いいえ、止めておきます」

更に顔を明るくさせたアーティはハツと我に返つたのか俯いた。この子……

「牢屋だからって、暗くなることないよ?」

「…………え?」

「君が何で捕まつたかなんて僕は知らないけどや、どうせなら楽しんだら?」

「…………できま、せん……だつて……」

ふうっと溜息を吐いた。

「両親を毒殺しちゃつたから?」

「…………」

「何でか、聞いて良いかな?」

僕が言うとアーティは少し悩んでから……はいと、答えた。

僕はニコッと笑う。

「…………私の、……未来は決まって……たのです。」

「決まつて?」

「はい…………両親に、全て……将来も何もかも決められていて

……私の、村ではそれが普通で……」

僕は牢屋の扉を開き、中にヒヨイッグと座つた。そして辛そうに話す

アーティの頭を撫でる

そうすると、彼女は小さな微笑みを作った。

「…………両親に愛されなかつたわけじゃない……んです。」

そう言つたアーティをキュッと抱きしめた。

アーティの肩は震えていて僕は言葉を紡ぐ。

「ねえ、何で僕が牢屋の見張りなんて仕事についたとおもつ?」

そう言つた僕にアーティの泣き声は一度、止まつた。

僕はそのまま言う。

「陛下と知り合いだつたから……つていうのもあるんだけど……牢屋の中でも、楽しい人生を歩める人が居て欲しい。僕が、此処で笑いを作れるなら……何か、楽しいと思える事があるなら……僕は、嬉しいんだよ。」

「…………ゆ、コウト……さんのお陰で、楽しそうです……」「…………」

ブイッと顔を逸らすアーティ。

ツンデレかつ……」「れぞツンデレなのかつ!…?

凄い可愛い……抱きしめて良いかな?良いよね?もう一度ぐりこ……

「かわいいなあ」

アーティはキツと睨みつけて僕を牢屋から追い出す。

ひどいなあ……

「ほら、餌食一緒に食べない?」

「…………食べる」

僕はニコニと微笑を作る。

「…………コウ君が来ない……グスンッ」

「お前実はコウト馬鹿だよな?」

「煩いよ僕のモルモット。」

随分とリクリアに気に入られていたコウトは此処に居なく、思い切りエミも溜息を吐く。

そして、コウトとアーティを除く場に、扉を叩く音が聞こえた。

「誰だー？」

我が家から言つよつにエミが言つと俺俺…という声が聞こえた。

「俺俺詐欺ならおとなしく牢屋に入ってくれ」

「絶対分かってるだろ――――――? エミイー――

そう言つて扉を蹴破つてきたのは……この国の陛下。ウエレスト。二イツと笑つたウエレストはん?と辺りを見渡す。

「コウトイないか? コウト」

「アーティと一緒に居る」

「チツ……アイツに話しがあつたんだがな……」

「何かあつたのか?」

「コウト=レディアスをこの城から追放する」

**罪人と僕。（後書き）**

早くも最終回！？……んなわけないのです。

69日も更新してなかつた！（他の小説もだー。）

「ゴウト＝レティアスをこの城から追放する」

その声はまあ聞こえていたが僕はまったく慌てていなかつた。うん。  
そういうえばそんな口か。

何か妙に慌てる声が聞こえてきた。僕も行こうと立ち上がるとキ  
ュッと服の裾をアーティに掴まれた。  
ん?と振り返つて微笑めば、不安そうな顔でああさつきの陛下の言  
葉かと妙に納得できた。

「……いかないで、下さい」

「…大丈夫だよ、アーティ。あの肩な陛下は人を驚かすのがだい  
すきなんだ」

片手でピースすれば安心した顔で「クリッ」と頷いてその手を離して  
くれた。

さ・て・と!

あのお遊びが過ぎる陛下を一回殴つてこなくちゃね。

「どしたの一?」

「ゴウト!…お前がこの城を追放されると…つ…」

「……陛下、前言撤回するまで絞めますよ?」

そういうてウエリストをたこ殴りにするHIMIさん。どうから出した  
のか片手に縄を持つユキ。牢屋越しにアースは殺氣だつてリクリ  
アは片手にメスを持つて構えている。

「…ゴウトー!…助けてくれー!!!!」

漫画みたいな砂埃を上げて見えなくなつた陛下は多分HIMIさんにボ  
ツコボコにされてるのだろう。

「まあまあ、HIIさん落ち着いて」

「シと笑いながらウエレストに近づこうとHIIさんは納得できない顔で僕に言つてきた。

「良いのかー？お前は追放され……」

「ウエレストの話は 絶対に信用しないでくださいね」

「シコリと、そう、シコリと告げた。

後からユキに聞いたところ僕のその時の表情は めちゃくちゃ腹黒かつたらしい。

「ウエレスト、冗談の通じないコイツ等に話すところなるからな。今日が”嘘吐きの日”だからってわざわざHIIさん達に言つて来るんだからね。諦めた？」

「どうようとお前が真に受けたなきゃ意味ないだろ？が！あーーー！ 痛えーー！」

「自業自得。」

「ふざけんなーー！」

「いや、どっちが。」

「お前がだ！」

「へえ、君は僕が悪いって言つんだ？弱いものいじめ？ああ、これが陛下の権力？ま、どつ足搔いても 僕に弄られる運命は変わんないよ？」

「鬼が…………」

散々叫んだウエレストは力尽きかけて僕はこんなもんかっと牢屋からウエレストを放り出した。

「あと、お騒がせしました。」

「…………あ、ああ。」

「…………意外と腹黒体质だな……お前」

「というより、黒すぎでしょ？…」

「わつユウ君強いね！…陛下まであーなつちやうなんて…」

三人がビクビクしているのに一人だけ元気でニッコニッコしているリクリアが物凄い可愛い。

遠くからアーティが牢屋から顔を覗かせてるのも見えてクスリツッと笑みを落とす。

「そういうえば、何でお前陛下にあんな態度が取れるんだ？」

あれ？アースには言つてなかつたかな？というよりエミさん以外には教えてなかつたよ、ついで興味深々といつ顔をしている。

「第一に僕が陛下の親友だから。第二に、僕が王族だからかな」

またしてもフリーズ。いや、王族つたつてようは親戚だよ？まあその辺の一般兵には知られたくないなって思つたから母親の旧姓を使つてるんだけどね。

「おおおお、王族？」

「うん。僕の父親がウエレストの父親の弟なんだ。そんで平凡な母親に一眼ぼれで結婚したらしくて城中大騒ぎ。あ、僕の本名はコウト＝レイズ＝ウエスカーテル」

「…わ、陛下と同じじゃない？」

「うん」

「…そんな人が、牢屋の見張りでいいんですか…？」

ユキがおそるおそる聞いてきた。うーん。そういう反応嫌いなんだけどな。

「此処の見張り面白いし父さんからも言われたけど此処の仕事止め  
る気はないから」

「…………良かつたです。」

遠くからポツリッという声が聞こえてみれば鉄格子を握り締めてるアーティ。

…うーん、とりあえずアーティはリクリアの隣に移動をせておこう。  
アーティの出番がなくなる。

「ま、安心してね。まだエミさんとコントしたいしコキに大笑いさせてみたいしアースをリクリアと弄りたいしアーティを可愛がりたいから。」

「ワンブレスで言つたな……」

ポツリッとエミさんが呟いた。

あ、そうそう。

その日賊が侵入し、その賊を恐れ多くも陛下が一人で蹴散らし大怪我で帰ってきたという噂が立つてゐるが……

賊なんて侵入してないしその怪我は全部 エミさんのせいですからね。伯父様

## 僕と休み。 前編

休暇だ。ここ二ヶ月ぶりの休暇だ。

別に僕の仕事は其処まで忙しくはないが何せ人数が人数だ。そういう休めない。

と、久しぶりに取った休暇で僕は久しぶりの街に出てみたりした。この街で有名な闘技場へと足を運ぶと相変わらず騒がしくて僕はひょこーんっとその闘技場の試合を見た。

其処に立っている一人の青年。金色の短い髪の青年はニカッと笑つて目の前の相手を倒していく。

「ふーん。……今日の遊び相手にしよう」

そうそう。僕はよく、性格悪いと言われるよ。

青年が闘技場を出たのを見て僕も後ろから着いていく。五百メートル程歩いた青年は僕が青年の後ろをずっと歩いていることに気づき不審に思つたのか振り向いた。

「……なんだお前」

「僕？僕はユウト。」

「そういうことじやねえよ！」

「じゃ、どういうこと？二十文字以上三十文字で言える？何だお前つて言われたから答えただけだよ？」

「……………ハアツ」

「あ、扱いすれえ野郎だな。この肩がつて思つたな」「何で分かるんだテメエッ！……！」

あ、ちょっと遊びすぎたかも。うん。といつより街中でどりどりと剣を抜く田の前の青年に僕は目をキラシッと光らせた。

「よし。君を逮捕する」

「はあっ！？」

「実は僕お城関係者」

「んなわけねえだろ？がーてめえみたいなちつこい奴がなれるなら苦労しねえよ呆け！」

あ、ちょっと力チーンときた。ちっこい言ひなつ！確かにその……普通の14歳平均に100cm以上足りてないけど……

「ん、ちょっとムカついたから…………僕も銃刀法違反しよ。」

まあコイツを捕まえるためなら別に駄目ともなんとも言われそうだしね。と僕も短剣を抜いた。

ファイト！

見たいな？

「うぜえ奴は一発殺るに限るつー。」

「うわ、随分と物騒だね」

そういうながら相手の後ろに回ると見切られていたのかその長剣が思い切り頭上を通りていった。あ、髪が二三本落ちた……、まあいいか。これぐらいで禿にはならないし。と僕はその短剣を下から青年の首下に持つていった。

「はい。僕の勝ち～」

「なつ……」

「知ってる？長剣の方がパワーはあるけど短剣の方が素早いから大きな攻撃がきたら隙ぐらいつけるよ？？」

「…………く…………」

その言葉に黙ってしまった青年。

僕はますます一ヤーヤした。

「さ、て、と。青年。名前は？」

「…………レキ」

「よし。レキ！さあ今すぐ牢屋逝きか……僕と来るか、選べー。」

「両方同じだと思つんだがつ！？」

「僕ときたら牢屋に逝くのではなく牢屋見張り番になつてもらひつ」

「両方嫌だ！」

「じゃ、死ぬ？」

「わわわわ、悪いっ！！分かつたつ分かつたよーー！」

滅茶苦茶やつれたよつて言ひレキ。

僕は短剣をしまって、レキの言葉を待つた。

「お前と一緒にいけばいいんだからががあああああつづー。」

滅茶苦茶やけくそに言い切つたレキは疲れたように座り込んだ。

普通の休暇で、なんと

## 従業員一人ゲット！！

それはまだ午前中の話だつたりする。

僕と休み。 前編（後書き）

後半に続く。

僕はレキを連れて（逃げたら犯罪者扱いだよ？って言つて脅してるので）買い物をする。

主に武器を中心に、この街は一応この国の首都だから武器屋なんて五つぐらいあって争つてるんだよ。 見始める。レキも興味津々という顔をしていた。

それから色々見始めて一時間後……

やつとレキがいないことに気付きました。逃げた？いや、あれは違うな。……迷ったんだっ！！誰が？僕が、レキが？うん。レキが。きつとレキ。ずっとレキ。絶対にレキ。多分レキ。よし、決定。……って事で探しにいつてやるか……と僕は振り向き歩き出す。

大きな欠伸をしながら歩き出すと見覚えのある金色の髪が見えた。あれは……レキかああああつ……と僕はダッシュしてその金色の髪の肩を叩いた。

「はい？」

思つたより高い声。何処かレキに似ているけどレキじゃない……少女は僕を見て首を傾げてきた。

「あれ？レキじゃないや。御免なんでも……」

「兄さんを知つてるんですか？？」

「兄さんを知つてるんですか？？」

「レキの妹？」

「はい。ロキといいます。貴方は……？お城の関係者のよひに見えます……が……」

そう言つて金色の長い髪を揺らして聞く少女、ロキ。ロキかあ……うん。可愛い。

「僕はユウト。よひしぐね。ロキ」

「はい。」

ふんわりと微笑む口キ。僕も思わず微笑む。

のほほーんとした空気が漂う中、それを破る者が居た。

「おーりおーら、んなところで立つてちや邪魔なんだよああ”？」

そう言ってやつてくる所謂チンピラ。頬に十字傷を作った大男は僕と口キを交互に見てはつと笑い飛ばした。

「そこの穢ちゃん置いてくつていうなら許してやるひじやねえかおら坊主」

「坊主じゃないから無理だね。行こう口キ。」

「え？ でも……」

そう言って恐ろしい者を見るようにいつの口キ。その手を引けば僕の横にズシンッと斧が落ちてきた。……斧使いか。

大男はへへんつと笑う。……僕の倍はありそうな身長が物凄いムカツク。

危ないからと口キを下がらせれば鼻で笑う大男。

「チビの癖にナイト気取りか？ はつ、上等じゃねえか。餓鬼は餓鬼らしく餓鬼の家で母ちゃんの乳でも吸つてろ」

そう言って斧を構える大男。

……僕の嫌いな言葉をそう何度も使いやがって……「コイツ。

「ゴロツキはゴロツキらしく闘技場で殺されてきたらどう？」

「コツコウトさんつ！？」

その言葉に驚く口キ。僕に任せときなつ？ つて微笑を見せれば少しホツとしたような口キ。

「はつ、餓鬼の癖によく言ひじやねえか。」

「へえ。チビとか餓鬼とか言つてくれるじゃない？ なら僕に勝つてから言つてみたらどう？」

そう言って背中の大剣を抜いた。ふつふつふ。僕は腰に短剣と長剣。背に大剣を持つてゐんだ。……良くウヨレストから剣マニアつて言われるや。

「そんな玩具でどうする気……だ……？」

目の前には僕に切り捨てられた斧。大きな斧の刃はドスンッと口キ

から1m離れた場所に落ちている。

「ウエレストと僕のお気に入りの隣国の武器屋の大剣さ。斬り味抜群だろ?」

そういうと大男の後ろに居た仲間らしき奴が僕を指差した。……空氣薄いね。アンタ。

「あああ、アイツははは、……つ最強の牢獄番ですよつ…」

「牢獄番?」

聞いたことないらしい。というか僕も初耳だ。

「ユウトって呼ぶてたでしょ? アニキ! アイツはただの牢獄番に見せかけた殺人鬼つスよつ!」

「おいこら待て」

思わず突っ込みを入れる。僕人を弄るのは好きだけど殺したことば一回もないよ?

まあ良いや。

「はい。全員牢屋B逝き」

何でBかって? こんな相手は僕が御免だからさ。

「…強いんですね。ユウトさん」

「うん。見直した? 口キ」

「……はいっ! !」

「ユウトオオオツ! ! 何処に居た…って口キつ! ?」

何処にいたのか走ってきてきたレキは口キを見て物凄い驚いている。そりやそうだね。妹がこんなところにいるんだもん。

「大丈夫だったかつ! ? さつきこの辺でチンピラが捕まつたつて聞いたが……」

「大丈夫です。ユウトさんが助けてくれました。…強いですよユウトさん。兄さんもボロ負けだったのでしょうか?」

「何で知つて…つ」

「僕が教えたから」

そんな馬鹿騒ぎをして僕の休日は終わつた。

何かあんまり休んだって気がしないな……あのチンピラのせいだ。

キという可愛い子とお知り合いになりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3636e/>

---

牢屋と僕。

2010年11月12日20時36分発行